

に英語で表現するように励ましてもうまくいかないのは、文法の知識はあるけれども自信がないからではなく、文法の知識がないゆえに自信を持っていないからではないでしょうか。今回の発表は、英語が苦手な学生のための教材開発に関する実践報告です。開発に当たっては、英語は日本語とはほとんど共通性を持たない外国語であるという認識に立ち、英語を使うために最低限必要な文法を厳選して提示すること、6年間の中学高校での英語学習の中で英語の文の構造を理解できずに混乱している学生にそれらを首尾よく提示すること、そして豊富な語彙を提示することによって、実際に学生自身に起こりうる経験や事柄と文法事項をできる限り結びつけることを目指しました。また、主語や目的語、名詞や形容詞という概念をどう提示するか、名詞句における前置詞の後置修飾を文法コーナーで取り上げるかどうかなど、明示的に提示する文法項目をどのように絞り込むかについて膨大な時間を割いて議論を重ねてきました。そして、学生たちが実際の生活やこれからの人生の中で遭遇する可能性のある場面の選定についても同様です。発表では、第二言語習得や文法の理論に拘ることなく実用に徹した教材 *Make It Simple* について、その開発の試みを紹介します。

Aug. 30 (Sun.) / 10:10-10:35 / 213

Associate member's presentation

## A Guide with Models for Process Writing

『モデルで学ぶプロセス・ライティング入門』  
 <株式会社松柏社企画>

柴田 美紀 (広島大学大学院総合科学研究科)

本発表の目的は、例文をインプットとして与え、学生らがそれらを適宜模倣しパラグラフを書きあげていくモデル・ライティングのテキストを紹介し、その効果について示すことである。日本においても英語のライティングにプロセス・ライティングが取り入れられるようになってきた。しかし、このアプローチを通して各段階で意識すべき作業やパラグラフ構造を理解しても、首尾一貫したパラグラフが書けるわけではない。また、語彙や文法知識が必ずしも文章の良し悪しを決定するわけではない。

外国語学習の上達、特にリスニング力をつけるためには、その言語にできるだけたくさん触れることは不可欠である。学習者はインプットの中に初めて耳にする、知らない表現に気がつく、「わからない」と思う。そして、同じ表現がインプットの中に繰り返し出てくると、辞書で調べたり教師に尋ねたりする。そして、その表現を理解すると、そのうちに発話の中でその表現を使っていることがある。こうしたプロセスはライティングにもあてはまる。つまり、文のインプットにたくさん触れることがライティング上達につながる。

そこで、パラグラフの構成部ごと（話題文、支持文、結論文）に複数の例文をインプットとして提示したテキストを作成した。学習者はインプットの中から自らが伝えたいことを表している例文を選んで組み合わせる。また、テキストには前後の文が関わりを持つようにテーマ毎に適切な連結語句も例示してある。ライティングにおいてもアウトプットのためにはインプットが不可欠であることを前提に、多くの例文に触れそれらを適宜まねることで、文章力の基礎となる「文力」をつけていくことがテキストのねらいである。本発表では、英語ライティングの授業を受講した計60名の大学生が実際にテキストを使用し、学期の初めと終了時に書いた英作文がどのように変化したかを示し、テキストの効果についても具体的に述べる。